

○大福 月江 井形 和枝\* 遠藤 千鶴

( 四国大短大 、 \*さくら診療所 )

【目的】ザンビア共和国では5歳以下の乳幼児死亡率が20.2%と高く、その原因の1つとしてPEM (protein-energy malnutrition) 系栄養障害が考えられている。しかし現地の乳幼児や学童児が実際にどのような食事をしているのかはよく知られていない。そこで乳幼児と学童児の食事調査および食環境調査を行い、栄養素別摂取量から日常の栄養状態と衛生状態を知ることが目的とした。

【方法】ンゴンベコンパウンド (低所得者層居住区) で生活している8世帯を対象にして、食事調査は聞き取り法、秤量法で行い、栄養価は現地の食品を分析しその成分値に基づいて算出した。食環境調査は聞き取り法と観察法を用いて食品の購入先、水の処理方法、料理の品数、調理器具を調べた。

【結果・考察】食事調査の結果、1歳5ヶ月以下の乳幼児については母乳のみであったため、データを得ることはできなかった。幼児・学童児は主食の摂取量が多く、主食からのエネルギー、炭水化物、鉄、カリウムの摂取は多いが、逆にたんぱく質、脂質、カルシウム、ビタミンB群の摂取は少なかった。一方、食環境調査の結果、食品の購入先はコンパウンド内のマーケットもしくは露店が主であり、水の処理方法は塩素系の消毒剤や沸騰水を用いる世帯とそのままの生水を用いる世帯とがあった。消毒剤は購入費用がかかるため、衛生状態が悪い井戸水を使用していると思われた。調理器具はどの世帯も主食用と副菜用の2個の鍋があり、それ以外の調理器具を所有していたのは生活にゆとりがある世帯であった。収入の少ないことが衛生状態の改善と十分な栄養素摂取を妨げていると思われた。